

ヤスパースの理性と愛について（その1）

―愛しながらの闘い―

松田幸子

はじめに

理性と愛が不可分の関係にあることについて、ヤスパースは次のようにのべている。

「理性とは、愛があらゆる愛の諸様態をすべて包越しつつ、そのうちに現存している時には、この愛の特徴である」(『真理について』一〇〇四)「理性が絶えず関連づける絆であるように、愛は積極的に充実してゆく絆である。理性と愛は、それらが全く制限なしに、活動的になるところでは一つになる」(同上九八九)「愛は理性の魂である」(同上九九二)

以上のように理性と愛が不可分であるのは、どのようなことを意味するのであろうか、またその倫理的な意味は何か、それらの事柄について考察するのが私の課題であるが、この小論では、理性と愛についての考察の第一段階として愛についての考察に重点をおくことにしたい。

愛についてはさまざまな形で語られ、この言葉は、時には、またか、と思われる程に軽い気持で使われ易い。異性に対する愛、肉親に対する愛、運命を同じくする人達に対する愛、人類に対する愛、神に対する愛など、どのような形で語られても、そのことで愛その

ものについて語られたことにはならないであろう。「私が思惟しつつ愛の本質を確信しようとするれば、私は愛の究極的な根源にまで遡り、そしてまた愛のすべての具体化にまで降りなければならぬ。愛はある個別的なものとしてじかに把握されるべきではない。愛はそれが姿を現わす諸状況の中で追求されるべきである」(同上九九三)このようにのべているヤスパースは、愛が包越者の諸様態において分枝して存在し、その中で現象し、いわば愛の身体ともいべきものを手に入れていることに注目して、そこから愛の諸様態と、愛の性格描写を行っている。

(1) 愛の諸様態

イ 生命的現存在の愛

現存在的な人間とは、身体的、生命的な存在として、まだ自己意識に目覚めることもなく、自らをとりまく環境の中にただ埋もれて、過去―現在―未来と流れゆく時間のうちで生き、本能や衝動に従って己れの幸福を欲求する。従って生命的現存在の愛は、物理学や生物学や心理学などの科学によって探究される以前の直接的な人間に宿る愛である。それは性愛をも含むところの生命への愛である。例えば、肉体における燃え上りとしての男

と女の一体化であり、父が子供をつくり、母が子供を生むという実り豊かさをもつものである。その愛は、子供という新しい形態、新しい個体を生み出すことで、人類の存続に関与する形で、不死性を手に入れる。

□ 知性的愛 意識一般としての私は、他の意識と共に、悟性的知の合理性を媒介にして事物を理解できる。意識一般としての私は、他ととりかえることのできる主体である。従って意識一般としてのわれわれに宿る愛は、知性的愛であり、それは普遍妥当なものへの愛であって、例えば数学的な形象や自然法則などのように誰でもが正しいと認める真なるものが持っている明証性へ向う衝迫である。人はこの明証性を手に入れることによって、これまでは概観不可能だったものが理解し易くなるという実り豊かさを経験する。また、契約による結合としての結婚は、いわゆる意識一般の正当な愛である。これは、家庭的物質的な事柄に類するあらゆる継続をもって、二人を互いに一生結びつけるためのものであり、同時に家庭をつくり子供を養育する目的をもって二人を結びつけるものである。この結婚を支配するものは法律と道徳法則である。これらの法を愛することで、二人は人間社会において夫婦として認められ保護されるのである。

ハ 精神的愛 精神としてのわれわれは、理念としての全体及び世界に対して、職業や学問や芸術活動を通して関与する。感情や情緒をも含めた全体性、主体と客体、個と普、自己と他者などが相互に含み含まれて統一をなすことが精神の特徴だからである。従って精神的愛は、一つの理念によって統一された世界（国家、社会、文化の領域）に向い、その一員として愛されとり入れられ、所属することへの喜びである。具体的には次のような一つの世界に対する

愛である。この世界は私の出生や私の家族、私の友人、私をも含む国民、私の使命、私の課題をつつんでいる歴史的な世界である。そしてこの世界にある一切は、一つの理念によってまとまっていることよって充実されて実り豊かになる。調和のある風景美への感動もこの精神的愛である。

二 実存的愛 以上のような愛の考察からみて、「生命的なものにおいては種が個体に対して優位をもち、知性的なものには普遍妥当なもの、精神的なものには理念が優位をもつとすれば、実存的なものには実存としての個体が、種や普遍的なものや理念に対して優位をもっている」（同上九九七）ここで「実存としての個体」という場合の実存という言葉は、ヤスパースの哲学にとって最も基本的なものである。そこで、実存的愛について知る上で必要な限りでまとめらば、次のようになるだろう。ヤスパースによれば、現存在、意識一般、精神としての自己は、本来の自己ではなく、本来の自己とは実存である。ところで、現存在、意識一般、精神としての自己はわれわれにとつて客体となることができる。私は身体をそなえた対象的なものとしての自己を反省することもできるし、あるいは他の自我と同様に思惟するものとしての自己を考えることができる。しかし「実存は決して客体とはならないものであり、そこからして私が思惟し行為するところの根源となるものである」（『哲学』Ⅰ一五）それゆえ実存とは、思惟や反省の対象としてはとらえられない自己存在なのである。実存が客体的ではなく主体的であり、思惟と行為の根源であるということは、実存は、対象的にとらえられるがままの自己ではないということである。例えば、私が人生の重大な岐路に立って将来どの方向にすすめばよいかと悩んだあげくに、自分で選んで決断しなければならぬ状態が起こったとき、

いったい真実の私自身は何者であろうかと疑問に思うことがある。そこで私の肉体的な特徴、社会的な地位、自分がこれまで身につけてきている知識や技能、性格などを考えあわせて私はこのような人間であると規定することはできる。その反面、私は確かにそのような人間ではあるが、それだけではないような気もするという思いが残る。私は現在のこのままの私よりもっとましな人間になれるような可能性をもってここにいるとも思う。しかし、その可能性は実現してみなければ私にも他人にもわからないものである。人生を送っていく上で、私は自分の可能性をいろいろと考え、状況に応じて努力しながらあれかこれかの事柄を、自由に意志して決断して行爲する。この行爲の主人公となるのが私自身であり、真実の私そのものという私の実存である。そのような可能性をもった私の実存とは、他の誰とも置き替えることのできないこの世でたった一人の私である。それゆえ、実存とは、本来的な自己をもとめて、つねに自己のあり方と生き方とを選択し決断しながら、自己自身を実現してゆくその過程においてのみ存立しうるものである。ところで、被造物としてのわれわれは、自分で自分を創造したのではない。したがって実存が選択と決断とによって実現してゆく可能性も、実は自己を越えたものから贈られたものである。すなわち「自己存在の深みは、その前に私が立っているところの超越者の中に、その規準をもってゐる」のである。（『真理について』五四一）

実存的愛とはこのような実存から実存へ向う愛である。それゆえ実存的愛の対象は、私の本来的な存在可能性であるので、それは認識の対象となり得るような確実に知られ得るものではなく、愛によってのみ可視的なものとなるようなものであって、本来的に愛されることによってのみ輝き出るように思われるものである。その場

合の愛とはヤスパースによれば、忠実さのことである。その忠実さは、単なる感情とか固定的な堅実さではなく、無制約的な結合であるかのような忠実さである。この忠実さは、道徳的信頼性でも氣質の不変性というものではないが、それらを自らのうちにつつまつ、自らが形而上学的根拠に結びつけられていることを承知しているものである。それを実存的夫婦愛において示せば、次のようなものである。実存的愛による夫婦の結合は、無制約的で、非歴史的で、無契約的であり、二人を結びつけているものは、超越者に根拠をもってゐるのであり、偶然的な出来事や、道徳法則や、法律によるのではない。この意味するところは、ヤスパースが愛の不思議さを説明するのに度々用いているゲーテの詩「あゝ汝は過ぎ去りし世の我が妹なりしか、妻なりしか」の中にみられる。「この愛は、時間の現象のなかで、誰にも見えないはずまのように落ちてくる。しかしこのいなすまに当たった者には、それによって、永遠の昔からすでに存在しているものがあらわになる。この愛は歴史的には現象として存在するが、そのばあい、時間のなかでは、決してそれ以上の本質的な歴史をもつものではない。なぜなら、この愛は、新たな根源性において無限に反復する愛であるからである。この愛は、若々しい情熱のよそおいにおいても、老年の静けさにおいても、同じように力づよい。この愛は、思い出として、期待として、あくまでも現在のである」(『哲学の学校』)

実存的愛によって愛し愛される二人は、その愛を通して互いに本来的な自己をみつけ出すのである。「私は、自分が愛されている状態のうちにおいて、私を愛している人を愛し、他方その人によって私と共に共通に愛されている存在を愛す。愛は存在に対する愛によって初めて充実される。愛の高揚は、愛において共通に愛される存在の

高揚によって決定される」(「真理について」一〇〇一)。「私は、私を愛している人を愛す」ということは、愛があたかも己れのうちに循環しているように思われがちである。しかしこの場合の存在とは、「実存とは可能的存在である」という場合の、その可能性のことである。それは超越者によって贈られたものと考えられるので、その存在についての愛はまた神への愛でもある。ヤスパースが「愛は二つの極の間で遂行される。一方では私は人生の伴侶を愛し、すなわち現存在(生命的なもの)、意識(知性的なもの)、精神、実存としての他者を愛している。これに対してまた同時に私は存在を愛する」(同上一〇〇一)とか、「神に対する愛と人間に対する愛は対立して互いに排除しあうように、あるいはやはり一方が他方を下位にあるものとして背景へと押しやるようにも思われる。……しかしながら両者は不可分である。われわれが人間なしには神を愛せないし、又神なしには人間を愛せないことは、われわれの真理存在の特徴である」(同上二〇〇三)というのは実存的愛の特徴を示しているのである。「私は、私を愛している人を愛し、他方その人によって私と共に共通に愛されている存在を愛す」ということは、更に次のことを意味している。実存は、超越者より贈られた自己の本来的な存在可能性を、実存的愛によって確信させられ、その愛によって、自己の本来的な存在可能性を現実化することを促されるのである。ヤスパースが「ゲルトルートがいなかったなら、私は自分の哲学的決定的な地点に到達できなかったであらう」という場合、彼は、妻のゲルトルートの実存的愛が彼の才能(本来的自己)を限りなく伸ばすようにと要求し、彼の人生を実り豊かにしたというのである。

愛の諸様態についてのヤスパースの見解は以上のような四つの形態においてのべられているのであるが、更に彼は性愛と形而上学的

根拠からの愛(超越者からの索引力を経験する愛＝実存的愛)の重要な働きをつけ加えている。性愛はすべての生命あるものに固有なもので人間だけ固有なものではない。性愛はうつろい易いものに固執する衝動力に支配されており、性愛が人間的であるためには愛の可能性のあらゆる他の様態との結合を必要とするが、その性愛の妥協を知らない衝動力が、人間のあらゆる愛にも含まれている。また「形而上学的根拠からの愛は、一者を経験するが、その一者から、一切の愛が、性愛ですらも充実されている」(同上二〇〇一)ヤスパースが指摘するのは、愛のあらゆる様態は、性愛によって力を与えられており、また形而上学的根拠からの愛によって方向づけられていることで統一されていることを意味している。それを裏付けると考えられるような彼の言葉がある。「愛のそれぞれの様態は、それぞれの他の様態が同時に現実的になる時初めて真実であり、完結する。それに反して一つの様態が締め出されるとすべての愛は衰微する。このような衰微は例えば次のようなものである。単に生命的なもののもろさ、単なる自然的な愛のもつ変わりのなさ——孤立して行く知的意識の荒廢——純粋な精神の実存のなさ——臆測的に己れを実存にのみ制限している実存の自然性のなさ」(同上二〇〇四)ヤスパースは更に次のようにもべている。愛の諸様態を生命的現存在の愛から実存的愛へと一序列と考えて、「下位のものは上位のものから導かれることで真実となる」

(二)愛の根本的特徴

ヤスパースは愛の諸様態を考察することで、愛の根本的特徴として、結合、実り豊かさ、をとりだし、それらは、それぞれに変容した諸様態をもつ愛の中に、類比的でしかも異質的な意味において含まれていると把握している。この実り豊かさとは、いいかえれば結

合によって何かを創造することである。そこで彼によれば、結合するが何ものも生み出さない愛は、真実の愛ではない。例えば、

「同一化」 愛の対象が自分と疎遠になったり、自分にとってどうでもよいと思われるところでは愛は勿論中止すると考えられるのであるが、ヤスパースは、更に愛するものと愛されるものが同一化した場合にも愛は止むと考えている。ところで、愛の対象は、大きく分類して非人格的なもの、人格的なもの、神、である。それらの場合の同一化とは、非人格の対象の場合は、自然観察における恍惚感などであり、人格的人間存在に向う方向での愛しながらの同一化は、あたかも私自身が全く存在しないかのように他者のうちで、また他者によって生きることである。「私が生きるにあらず、キリストが私の中で生きる」といわれるようにである。それは師、救済者、救世主に対して、信奉者達が同一化することと同じである。信奉者達は、信奉する相手と関与することで、彼と同じことを繰り返して、また彼との同一性のうちに自分の本性を手に入れるのである。そのような同一化の中にはおそらく陶醉感情、自我と対象の喪失という現象があるが、もはや愛は存在しないのである。しかし師と弟子の純粋な関係において、弟子が敬愛する師を心に浮かべ、このように時に、彼なら何を考え、何を語り、何を行うだろうかと問う場合は同一化ではない。弟子は、他者である師を心に思い浮かべることによって、いわば彼のうちで行為するのであるが、このことは、弟子が同時に自分自身の事柄から行為することを排除するものではない。しかもその時の弟子自身の事柄は、敬愛する人を心にえがき、その人と共に確信することによって、弟子の心の中でより明瞭に、より充実的になるのである。偉大なる人々をみることににおける一切の教育のもつ意義は、彼らのうちに本来的な自己存在を再確認すること

なのである。

「愛のない共同存在」 ヤスパースによれば、一切の人間的な愛は形而上学的根拠からの愛に支えられているということができて、愛は超感覚的なものの直観であるということができて、超越者への愛の飛翔は、一切の創造物を生み出すところの第一者に関与して、そこから自己の存在の根源を知ることであり、世間的な態度の内的な導きは、この直観された根拠への信頼によるものである。すなわち、世界の外にある一つの意味を根拠として、世界のうちに一つのはたらきが生まれるのである。従って一切の愛は結局他の人間に対する愛に結びつくのである。愛は共同存在のうちで実現されるのであるが、しかし次の共同存在にはまだ愛が不足している。

a 感染 個人（または万人）が体験するものを、万人（または個人）が体験するようにしむけること。各人はひとりひとりで感じていると思ひ込んでいるが、しかし彼の心に暗示的に注ぎ込まれたもののみを感じているにすぎないのである。このような状態にある私は、無意識的に、事実上は万人としての諸々の他人と同一化しているのである。

b 共感——他者のもつ悩みに憐憫を感じたり、他者のもっている喜びに共感を感ずる。

b 共同体験——われわれは同じ内容に関して意識的に交流を行って同じことを体験する。ここには憐憫や共感があるのではなくて、共同で再確認され、分かちあわれているところの同じ喜び、同じ悩みがある。

d 了解——私は、他人が体験した喜びや悲しみを、また他人が思念したり思考したり意志してうるものを受けとめることができ。その時、私はそれらのことには関与せず、他人のやり方でそれ

らを体験することもなく、またそのためのどんな協力もしないでただ単に察知するだけである。そのような場合も愛は不足している。

愛の根本特徴として、結合による実り豊かさをあげ、一切の愛は共同存在のうちにのみ存在するのべているヤスパースが、同一化や、感染、共感、共同体験、了解という共同体のうちに愛が不足しているとする理由は、ここには、本来の意味での愛しながらの交わりがみられず、従ってそこから生ずるであろうところの実り豊かさもないからである。ここにあるのは一方的な愛であって、この一方的な愛において、私は私の方をみむきもしないし、私を頼りにもしていない他者に自分を結びつけているからにすぎないからである。「愛は、人間に備っている最高の可能性を成就するために、自己と同じ水準の自己をみつける。すなわち愛は交わりのうちで、他の自己とともに自己となることである」(同上二〇〇九)「愛は共同存在のうちで実現される。自己存在は他の自己存在と結合し、その結果、それらの愛の運動のなかではじめて、今まで何かはつきりとしなかった一切のものが、パッと輝きでるのである」(同上二〇〇九)このような双方からの愛においてのみ、自己と自己がお互いに他の自己を通して初めて、本来的な自己自身を自覚するような交わりを手に入れるのである。ヤスパースによれば、自己から自己への愛しながらの交わりは、諸々の事柄や、世界や、神に対するすべての愛を自らの中に含んでいるのであって、この交わりが、これらの内容を共同社会的なものとして自らの中にとり入れる程度に応じて、愛は己れ自身を展開するのである。

以上ヤスパースがのべる愛の諸様態、愛の根本特徴を考察した限りで考えられることは、愛が実り豊かであり得る場所、すなわち人間的な真の愛の存在する場所は、自己と他の自己の間で、同一化さ

れない状態で交わりが保たれている所である。しかしそのような意味での交わりを導き可能にするものは、ヤスパースによれば理性なのである。

(三) 理性の根本的特徴

ヤスパースによれば、思惟は理性ではなくて、思惟をかりたてて、思惟の最大の可能性を展開させるのが理性である。「理性はあらゆる限界を踏み越え、遍在的であることを欲する思惟であって、このような思惟は、生起の法則性と秩序の意味において普遍妥当的に知りえられるものや、それ自身が一つの理性的存在であるものなどを捉えるだけでなく、他者をも白日の下に曝そうとするものである。さらにそれだけに止まらず、全く反理性的であるものの前にさえ立つて、それに働きかけ、それによってはじめ、この反理性的なものそのものを存在たらしめようとするものである」(「理性と実存」)以上の言葉の中には理性の根本的特徴がよくのべられている。理性の本質を一言でいうならば、総体的な交わりの意志である。その意味するところは、すべてのものを関係のない状態から、相互に無縁にある状態から、偶然から、相互に再びかかわらせることである。そのかかわらせ方は、何もかも喪失しないというやり方である。理性とは、ある何かを、法則と秩序たらしめるところのものであるかのようには思われがちであるが、しかし、理性自身は単にそれだけではなくて、実存の可能性を保持するためには、法則と秩序を破壊することさえも携わるのである。なんとすれば、実存は昼の法則(秩序ある世界)への服従と、夜への激情(死への激情で、ここには破壊あるのみ)の二つの方向を含むものなのである。夜への激情が単なる破壊とならず、昼の法則による秩序ある世界の建設に対して新

たなる境地をひらく場合には、実存はあえて夜への激情に身をまかせることとも可能である。夜への激情は昼の法則にとつては常に悪であるが、実存にとつては必ずしも悪ではないのである。実存が、昼の法則による秩序的な世界（例えば国家）を破壊する場合には、断固としてそこに同行するのが理性である。そのような意味での総体的な交わりの意志である理性は、自分では何一つとして生み出せないという特徴をもっている。ただ現に存在しており、かつ存在しうるものが、自らを示し、自らを展開するように思惟をかりたてるだけが理性のもう一つの特徴である。このような一切のものと一切のものとを結合へと、交わりへと、際限なく押し進めるところの理性は、第一に一者である神と端的に連関されなければならない。その意味は、理性は一者ではないが、一者を欲するのである。それは理性の根本特徴が統一への意志であるからである。第二に、理性は、一切の存在するものを一者へと関係させることによって、いかなるものにもその相対性と限界のあることを指示することによって、これら一切の存在するものを不安定へとつれてゆき、その存在するものから、それ自身がそれであり、またそれでありうるものを生み出させるのである。従つて理性は、それ自体では存在しない。理性は、内実としてはいかなる自分の根源をもたないのである。理性は、理性の源泉や、理性によって作用してくる一者の及びがたさを示すか、あるいは理性を通して呼びさまされる他者、そして運動へともたらされる他者を示すかである。

(四) 理性と愛の関係

ヤスバースは実存的な愛の交わりについて、「愛しながらの闘い」(『哲学』II六五)という言葉で説明するがこれは理性と愛の関係を

考察するうえで最適な言葉である。彼によればこのような交わりをする愛は、いかなる対象にもかならずあてはまる盲目の愛ではなく、明徹な眼を備えた闘う愛である。このような愛は、可能的存在としての実存から、他の可能的存在としての実存を、問題にし、おのおの者は愛しながら他者とともに自己をほり下げていくのである。それは二人の実存相互の闘争ではなく、自己自身と他者とが共に本来的自己実現を目的とする一つの共通の闘争なのである。その場合お互がお互を見抜くことが必要である。この闘争は、全く同等の水準に立つてのみ行われる。二つの実存は、技術的な闘争手段(知識や才能や記憶力や疲労度)の差異にもかかわらず、一切の力をお互に出しあうことによって同水準をつくり、真理のために闘うのである。それは実存の真理を獲得するための闘争であつて、普遍的なものもそのを獲得するためのものではない。他者の言葉をきく場合には、話し方のニュアンスまで実存的に真剣にとりあげ、それに応答しなければならぬ。この闘争において両者は、ためらうことなく進んで、自分を示し、相手に問わしめるのである。このような闘う自己献身を通じて、自己獲得をするのである。「愛しながらの闘い」におけるこの愛の明徹さ、徹底的に公明さをもつ交りは、ヤスバースが「真理について」の中で理性の特徴としてのべているものと同じである。ここに、彼は理性と愛の結合の形を示していると考えられる。また総体的な交わりの意志である理性は、一切の愛をこのように実存へと関与することになりたてることでそれらに統一を与えるとは彼は考へている。本来的自己生成のためのこのような激しい闘争のうちにこそ、まさに強い連帯性が生ずる。理性的愛の倫理学的意味はこの連帯性の中に存在すると考えられる。

(注1) 包越者という概念：人間としてのわれわれが物事をみるのはいつも限られた視界において行うが、その視界を限りなく拡げて行き、その極限においてあらゆる視界を己れ自身のうちに包み越えているものを包越者とヤスバースと呼んでいる。人間は視界を無限に拡げること存在そのものである世界、あるいは超越者と呼べるものと觸れることが可能となる。この超越者をも彼は包越者と呼ぶ。その包越者の諸様態を『真理について』から引用すれば次の通りである。

A われわれがそれであり、あるいはそれでありうるところの包越者は、現存在、意識一般、精神、実存である。

B 存在自身がそれであるところの包越者は、世界と包越者である。

C われわれのうちなるすべての包越者の諸様態の紐帯は、理性である。

欧文参考文献

Philosophy 3 Bde (1932) (Karl Jaspers)

Vernunft und Existenz (1935) (Karl Jaspers)

Von der Wahrheit (1947) (Karl Jaspers)

Kleine Schule des philosophischen Denkens (1964) (Karl Jaspers)

訳本参考文献

「真理について」(5) 小倉志詳・松田幸子訳 理想社 58年出版予定

「哲学の学校」 松浪信三郎訳 河出書房新社